

# SRID NEWSLETTER

No. 361 December 2005 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎 1

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

## 12月号

マニラ騒乱・マカティ時変の顛末記

JICA国際協力専門員 保科 秀明

私にとっての「地域研究」再考

日本貿易振興機構アジア経済研究所 松井 和久

## お知らせ

1. 懇談会 ○日時： 12月19日（月）18：30～20時過ぎ  
○テーマ： ルワンダの今（予定）  
○講師：駐日ルワンダ共和国大使 H.E. Dr. Emile Rwamasirabo  
（本年1月着任、元ルワンダ国立大学学長）  
○会場： 国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室
2. 新年会 1月13日（金）18時分～21時  
会場： 如水会館
3. 退会 有原 元博 さん

2005年11月30日

SRID 会員の皆様へ

JICA国際協力専門員 保科 秀明

SRID News 保科会員寄稿第2号をお送りします。舞台は2年ほど前のことになりますが、反アロヨ政権に対する国軍の若手将校率いる軍隊が実力行使を敢行して、民間のホテルを一時期占拠するという事件が起きました。そのホテルに泊まっていた私は当然事件に巻き込まれたわけですが、その顛末をご紹介します。長く途上国問題に関わっていると、いろいろなことに出くわします。近年には命を落とすような事件にまで発展することも珍しくなくなってきたのではないのでしょうか。これからも国際協力に携わる機会の多いSRID 会員の諸兄にもくれぐれもご注意を促したいというのが今回のメッセージです。

## マニラ騒乱・マカティ時変の顛末記

2003年7月27日・日曜日未明、フィリピン国首都マニラにおいて、フィリピン政府正規軍兵士が都心商業中心地区を封鎖するという事件が発生した。総勢350名ほどのいわゆる反乱軍兵士。反乱兵が陣を張った拠点は「オーク・ウッド」。30年以上前に建てられた由緒ある「ホテル・インター・コンチネンタル」の真向かいに位置する比較的新しいこのホテルは、各ユニットにキッチンやダイニングが備えつけられていて、長期滞在者や小さい子供、家族連れの一行が気兼ねなく滞在できるように設計されている。別称サービス・アパートメントともいわれ、時にエレベーター・ホールを通過する際、どこかの台所で料理する夕食の香りが漂ってくるのを楽しむことができる。一見のどかな家庭生活を過ごすのにふさわしい上品なマンションとでも言った風情のホテルである。そしてその前日の土曜日、このオーク・ウッドではいつもどおり何事もなく、静かに週末の夜が深けていった。

突然けたたましい電話の音に目を覚ましたのは何時ごろだったろうか。今ごろなんだろうと、まだ昨夜の酒の余韻を少しだけ残した頭で窓を見た。外はまだ暗く夜明け前であった。電話の主はKさんだった。彼はおなじJICAの派遣専門家の一人で、折に触れて世間話をする間柄である。あとになってこのホテルには8人のJICA関係者がいることがわかった。

「保科さん！ホテルが兵隊に占拠されました！危険ですから外に出ない方が良いでしょう！」とKさんの澄んだ声が耳元で響いた。

『エー！まさか！冗談でしょー！』と頭の中では半信半疑ながらも（9割は現実感が無く、1割ほどがほんとなかという感じだったから、いわば1信9疑と言うべきかもしれない）、

「わざわざ御連絡、ありがとうございます。」と礼を言ったと思う。

ベッドから起きて窓の外を見下ろした。暗闇に浮ぶ街灯に照らされて、オレンジ色の風景が何事も無いように静まり返っていた。普段なら夜明け前でもそろそろ、長距離バスや車、オートバイが流れ始めていい頃にも思えたが、今日は特に日曜日。通行人もまばらなのは当たり前である。

『何もないなあ…』

『Kさんの電話は冗談とも思えないし、しかし外はいつもと同じだなあ…』

と訝りながらも疑問というほどの気もわかかなかった。

そのまま窓際を離れ、ソファに持たれながらタバコを一服した。しばらくは眼下の街の様子をうかがう気にもなれなくて、窓越しに暗い空を眺めながら取り留めもなくタバコを吸っていた。

南国の朝は急にあけてくる。徐々に地平線のむこうの空が赤みを帯びてきたかと思うと、急に地上の街路は明るさを増し、見とおしも効くようになった。時計は5時30分を指していた。窓際に行き行って地上を見下ろすと、相変わらず閑散とした街路と眠りかえったビル群が見えた。交差点の手前には何台かの車が止まっており、駐車しているか信号待ちしているとしか見えない。ショッピング・センター前の交差点の中では車が止まっているが、商用車である。マニラでは驚くに値しない風景である。

あえて何か変わったところといえば、インターコンとシユー・マートの間の道路に20-30人の人垣が出来ていることぐらいであった。そのうちの何人かは人垣からも離れて、自由に行動しているように見えたので、『あの連中、こんな朝から何してんだろう。』という程度の印象であった。

そのうち、近所のコンドミニウムに住むA専門家から御気遣いいただく電話が入った。せっかく御気遣いいただきながら、当人の認識もあいまいだったから、Aさんは張り合い抜けしたかもしれない。7時過ぎになると、JICA事務所職員からも事態確認の電話が入り始めた。日曜日で早朝のことだったから、関係者には気の毒なことだった。

この頃になって、やっと反乱兵による占拠の拠点にいるのだという事態が飲み込めてきた。しかし反乱兵の室内乱入といった気配はまったくなく、また電気、電話が止まったりといった異変もなく、ホテル側からのアナウンスも一切なかったので、なお現実味が沸いてこなかった。

こんなあいまいな時間がどのくらい過ぎただろうか、8時半頃さすがに気になり始めロビーの受付に確認の電話をしたときだった。レセプションの係員が少し硬直した声でひそやかに、

「現金、宝石類、その他貴重品だけを取りまとめて、いつでも外に出られる用意をしておくように。反乱兵側と交渉がまとまり次第、宿泊客をホテルから退去させる。館内アナウンスを待て。」

という。ここに至ってやっと少し頭が回り始めた。

『さて、何を、どれほど持ち出すか… 現金、通帳、パスポート、パソコン、カメラ、車の書類、仕事の書類、着替え、歯ブラシ、髭剃り、常備薬…』、『他の日本人との連絡網をどうするか』、『JICA職員への連絡』、『Kさんへも退去準備の連絡を入れなければ…等々』。

ホテルによれば兵士側との交渉は既に始まっており、現状復帰にあまり時間はかからないだろうとの見通しであった。こうしたコメントは通常あまり当てにならないが、オーク・

ウッドは経営・管理をアメリカ企業が請け負っていると聞いていたので、最終的には危機管理ノウハウ、対応策などは相対的によいだらうと推測した。そして何よりも事の成り行きである。

『宿泊客は反乱側からすれば人質。この人質を解放するとは反乱側は本気で政府側と武力衝突する覚悟はもっていない。』

『もともとどこか要求の内容が散漫であり、受け入れられるまで徹底して占拠を続けるという強い決意も見えない。市民の心情に訴えるといったあいまいな作戦に期待を込め、人質を早く解放する事で英雄的な振る舞いとし、温情を背景に幕引きにする、というシナリオではないか』という気がしてきた。

『もしそうなら、この反乱騒ぎは長引かないし騒乱も起こらない』と思った。

『所持品も現金、パスポート、通帳を入れた事務用カバン一つで足りる』と思った。それと同時に、腹立たしいような空疎感に襲われた。

『反乱騒ぎを起こすほどでもない不平不満のために、あるいは一部兵士の安っぽい正義感のために、あるいは手練手管の政治家の口車に乗った兵隊のためにこんな騒ぎに巻き込まれるのは御免だ。』

という思いがわいて来たのである。

安っぽいビデオ・ドラマに金を払ったような気がしたのである。

27日朝10時過ぎごろから滞在客の退避が始まり、マニラ湾沿いのウェスティン、ダイヤモンドの2ホテルへのバス輸送が終わったのは12時ごろだったように思う。結局その日の内に反乱兵は撤退し、占拠されたホテル側はロビー、事務室の片付け、壊された事務機器の復旧といった作業にかかり、私がホテルに戻ったのは翌28日月曜日の昼すぎであった。

日曜日中に帰れなかったのは誤算だったが、1日半という短時間に全員が無事なまま、騒乱が収束したことは不幸中の幸いだったというべきであろう。

そしてその後、この事件をはさんで、ペソの交換レートがまた一段と下がっていった。

#### 顛末記：

後日この国の姿を見るような新聞記事を眼にした。 - エストラダ派の政治家と実業家が反乱に資金提供。ビクター・コルプス前情報部長はその実業家の名を明かせば身に危険が迫ると沈黙。(8月11日付マニラ新聞) -

つまり、軍隊を私物化する政治家がおり、その口車に乗る兵士がおり、それを金銭的に支援する実業家がおり、騒動の黒幕を公表するものは身の危険を恐れなければならないという社会。それとアジアに誇る民主主義とが共存しているという姿が、この国の形なのだろうか

## 私にとっての「地域研究」再考

日本貿易振興機構アジア経済研究所 松井 和久

アジア経済研究所で「インドネシア」を対象とした地域研究を職業として 20 年が経った。一般に「地域研究」という言葉は外国、とりわけ発展途上世界の地域を対象とした研究を指す。発展途上世界の経済・社会・政治・文化といった様々な分野は互いに密接な影響を及ぼしあっており、それらを近代的な学問ごとに切り取って研究するのは不十分であり、対象とする発展途上世界の総合的な理解を基礎として、学際的なアプローチを採ることが不可欠、という認識がそこにある。すなわち、発展途上世界が経済開発・発展に成功し、近代的な制度やシステムを備えていくに従って、先進国と同様に、近代的な学問ごとに切り取って研究することが可能となり、そのとき地域研究は役割を終える、とも考えられる。

20 年という年月を経て、インドネシアをはじめとする発展途上世界は以前よりも経済開発・発展を進めた。インドネシアでも民主化へ向けた制度改革が進み、2004 年には正副大統領直接選挙、2005 年には州知事、県知事、市長の直接選挙が実施されるに至った。首長と名のつくすべてを国民の直接投票で選出し、比例代表制を採る議会選挙でも全議員を国民が選挙で選ぶ（すなわち任命議員は皆無）。農村で誰もが自分の意見を堂々と表明し、政治家が不正を働こうとすればマスコミが大騒ぎし、大統領直接選挙成功の立役者であった総選挙委員会の委員長はじめ大半の委員が汚職容疑で裁判にかけられ、最高裁長官が汚職関連で 9 時間も汚職撲滅委員会の取り調べを受ける……。スハルト権威主義体制の 32 年を知る人々には、今のインドネシアは、全く違う国になったと感ずることだろう。

では、地域研究は徐々にその存在意義を失ってきているのだろうか。世界に生きる人々の暮らしや未来が明るくなっていく結果なら、そして情報伝達やコミュニケーションが発達して日常的なレベルでも国際理解が進んでいくなれば、地域研究が存在する意義は低くなるのは当然だ。地域研究に限らず、世の中で役割を終えたと判断されたものが、それ自体の存続維持を目的として自前の論理を世の中に推しつけることほど醜いものはない。

ただし、正直なところ、20 年付き合ってきたインドネシアが私自身にはますます分からなくなってきたのである。こんなことを言ったら勉強不足、一体 20 年間何をやってきたのか、とのお叱りを免れないかもしれない。なぜ分からなくなってきたと感ずるのか。それは、私がみてきた「地域」とは何だったのか、という問いから発するのである。

通常、「地域」とは「国」であり、インドネシア地域研究はインドネシア一国研究と同義であった。インドネシアの経済・社会・政治がどうなっているのか、どうなっていくのか、「国」をベースとして研究することが主務であった。そんな私が 1995～2001 年にスラウェシ島のマカッサルに JICA 専門家として滞在し、インドネシア東部地域開発政策への助言・指導を地方政府相手に行うという経験をした。そこには、ジャカルタや東京からは見えないスラウェシやマルクの世界や論理があった。さらに農村へ行けば、マカッサルや県庁所在地からは見えないその農村の持つ世界や論理があった。

「地域研究」の名の下に特定の農村へ入り込み、定点観察的に農村調査を行うことはこれまでのインドネシア研究にもよくあったが、それを演繹してインドネシアを語ってしまうことも少なくなかった。しかし私が見たのは、そうした農村調査の対象は様々な地域世界の一つに過ぎず、それを代表としてインドネシアを論じるときに抜け落ちるものの多さだった。一体、これまで私が「地域研究」という名の下に見てきた「地域」とは何だったのであろうか。現場の様々な現実のすべてを拾い上げることは不可能だとしても、そうした多様な存在を意識しながら「地域研究」を行ってきたのだろうか。スラウェシの農村などの現場へ行くたびに、こうした反省を痛烈に感じずにはいらなかった。

そんなときに、宮本常一の「忘れられた日本人」を手にした。日本の経済発展を支えてきたのは官僚や産業界かもしれないが、その陰で無数の無名の人々の様々な世界や思い、いやその存在すらもが忘れ去られていった。国から勲章をもらうこともない、傍から見ればごく普通に毎日を懸命に生きた人々、高度成長に邁進した日本の片隅で生きたそうした人々を訪ね歩いて聞き書きをし、ときには他の地域の話を変えつつ彼らの存在をしっかりと受けとめ、励まし、元気づけた宮本常一の姿に、外部者が「地域」とかかわる際の真髓を教えられた。以後、外部者としての自分が内部者である「地域」の人々とどう関係を作っていくのか、それが双方にとってどのような意味を持つのか、有意義な関係を持つにはどのような関係を結び発展させていけばいいのか、といったことを考えるようになった。

2001年3月に帰国後、日本の「地域」から学ぶ必要を痛感し、日本各地の地域づくりを学び始めた。日本の地域もまた、東京や県庁所在地からは見えない様々な世界や論理に満ちていた。どこでも、外部者には見えない様々な要素がドロドロに現場で絡まっており、きれいな物事は済まないことを痛感した。一村一品運動など日本の地域づくりの成功例が喧伝されても、その背景にある複雑な現実を想起すると、手放しで賛辞することはできない。そうなればなるほど、論文になるような簡潔で論理的な結論を導くことは難しくなる。ある程度書けそうでも、その地域の間人関係などを考慮すれば、書けることは必然的に限られる。こうした状況は、基本的にはスラウェシで体験したことと同じであった。

そもそも、これまで自分は主として論文を書くためにインドネシアの現場を相手にしてきたのだろうか。宮本常一に関する書物を読み、日本の「地域」から学び始めた現在、この問いに「イエス」と答えることはできない。少なくとも私の「地域研究」は、インドネシアという「国」に関する単なる情報分析や学問的価値の創造のみを目的と片付けられなくなった。インドネシアや日本の「地域」の現実や人々の世界・思いを常に意識しつつ、論文を書くことでそれを読む限られた人々を経由して間接的な貢献をするだけでなく、彼らとの関わりを通じて彼らから学びつつ互いに何らかの直接的な貢献をすること、その経験が他者にも共有されて様々な他者へ広がっていき、何か新しい動きや試みが生まれていくこと、を目指してみたい。そんなことを考えながら、思いを共有する友人たちと「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」（あいあいネット）という任意団体を2004年に立ち上げた。自分なりの「地域研究」の意義や位置は、こうした研究と実践との相互作用の積み重ねのなかから、いずれ必然的に定まってくるのではないかと考えている。